



認知症の方へのケアについて

デイサービス花みずき
管理者 蓮尾 寿美

1、デイサービスに通って来られた方を紹介します。

<Aさんの概要>

Aさん 開始時；69歳 女性 約5年間利用 家族構成 夫婦二人暮らし

認知症の程度 詳しくは不明で、質問に対する答えができない。

利用前の状況 63歳頃から同じことばかり言うようになり、68歳の頃夫と買い物に行き途中で迷子になられる。

利用時の状況 初めて来られた時には「よいやさ、よいやさ」「それ、これが」と言われるばかりで、言葉がわかりにくい状況でした。しかしレクリエーションのゲームには参加され、塗り絵は線の上をなぞることができました。すぐに、「帰る」と立ち上がられたこともありました。家族からパズルを昔していたとお聞きして、パズルをして頂くことで、少し座って居られるようになりました。また立ち上がられる時はトイレというサインだということもわかり、トイレ誘導をすることで落ち着いて過ごされました。

70歳頃より入浴拒否が続き、なかなか入浴をするのが難しく、1年くらい経過して「週1回は入浴させてほしい」という家族の希望もあり、入浴してもらうことになりました。最初は無理に入浴をして頂く状況でしたが、徐々にAさんも職員も慣れてきて、1年後には週2回入浴されるようになり、着脱も協力して下さることがありました。

Aさんの言葉は「そうやな」「はい」「おとうさん」など、少し増えてきたのですが、徐々に認知症が進み、入浴拒否や排泄拒否が再び出始めて、目を閉じて居られることが多くなりました。しかしそんな時でも職員が泣きまねをして「怒られた」と言って、Aさんに甘えると「ここにおったら、ええで。ここにおりよ。」と言って、その職員を触るように手を伸ばして下さる優しさはずっと持っておられました。



☆ Aさんから学べたこと

認知症の方の入浴拒否、排泄拒否とどう向き合うのか。サービスとしては必要ではあるけれども、どう提供するのか模索しました。職員の中でも「強引に行うことが本当のケアか」という意見もありました。しかしずっと入浴しないままでは、何のためにデイサービスに通っているのかわからないので、嫌なことは早く済ませて、後に嫌な気持ちを残さないようにしようと強引ではあった

けれど、3～4人がかりで入浴して頂きました。介助させて頂くうちに、徐々に方法やタイミングが分かって、脱衣時に、腕を挙げるなどの協力が得られた時はうれしかったです。

Aさんは拒否される時、怒った時は「なにしょんやー！いっぺん死んで来い！」とはっきり言われるのですが、職員が「Aさん、どうしよう」と甘えると、すぐに「うんうん。わかった、わかった」と優しくなられます。認知症が進み、言語的なコミュニケーションがとりにくくなっても、誰かの役に立ちたい、人に優しくしたいというAさんの気持ちがよく分かり、職員との間に大きな信頼関係が築けたように思います。



<Bさんの概要>

Bさん 開始時；73歳 男性 約7年間ご利用 家族構成 夫婦二人暮らし
認知症の程度 発語は殆どないが、質問にはうなずきで答える。

利用前の状況 62歳頃から認知症と診断された。

利用時の状況 言葉での指示が通じる時と、通じない時があったため、コミュニケーションは身振り手振りで行いました。Bさんは折鶴が得意。男性の利用者さんの傍が落ち着かれるようで、決まった席に座り、鶴を折って「子供にやり」と職員に渡して下さいました。78歳の頃、隣の方にお茶を勧めて下さり、足りなくなると、「おーい！」と職員を呼び、指差しでお茶がないことを表現され、教えて下さいました。

79歳の頃、「お風呂に入りましょう」などという指示が伝わりにくくなり、職員が交代で声かけしたり、浴槽を見てもらったりして対応しました。ボランティアさんが来られた時には、花笠音頭を口ずさまれ、皆さんの前で踊られたり、皿回しをしながらフロアを歩かれたりしました。80歳の頃、幻覚が見える様子で、歩行時何かを避けるため横歩きになり、座っていても、何かを探してキョロキョロすることがありました。食事の時も閉眼したまま手探りで食べようと食べこぼしが多く、途中で寝てしまわれることもありました。排泄もトイレがわからず、便座に座ってからも排尿ができず、時間がかかるようになりました。歩行は閉眼状態のため不安定になり、歩くのを急にやめてしゃがまれることもあって、車椅子で対応しました。眼を開けておられることもたまにあるのですが、焦点が合いにくい状況になりました。

☆ Bさんから学べたこと

Bさんはいつも穏やかで優しい方でした。お茶の心配や、隣の方から話しかけられると、必ず「うん？」と返事をされる気遣いをされていました。食事・排泄・入浴などに介助が必要になっても、自分でしようという意思是強く持たれていました。Bさんのさりげない優しさや職員に頼まれると「しょうがない

なあ」というような笑顔が素敵でした。Bさんと一緒に過ごすことで、Bさんの人間性に触れることができたと思います。言葉のコミュニケーションとは違い、手を握る、肩に触る、音を聞いてもらうなど、いろんなことで伝える努力をし、そして伝わった時のうれしさは何ものにも替え難いものでした。



2、お二人を通して

認知症という病気はあるけれども、その人らしく、自分らしく生きようと努力されている姿がありました。日常生活の困難さがあるけれど、人と仲良くしたい、手をつなぎたい、優しくしたい、人の役に立ちたい、そんな思いを感じることができました。認知症という病気はその人の心まで侵さないこと、その人の大事なところはしっかりと残っていることを学びました。

私が介護をする時に心掛けていることは、認知症の方の萎縮されていない脳の部分に働きかけたいという点です。そこで、穏やかに居られる場面や排泄の場面で、「みんなあなたのことが好きです。あなたの事を心配しています。何か困ったら言って下さいね」と言葉ではっきりと伝えることと、大声や暴力などがみられる時にも真正面から、「どうかしましたか？大声や暴力は止めて下さい」と制止し、「言葉で言って下さい」と伝えています。そうすることで、日頃の人間関係を築き、ご本人のしんどい（暴力や大声が出そうな）時にも役に立つのではないかと考えています。

介護する側、される側となっていますが、介護という行為を通して、利用者さんから多くのことを学んでいます。利用者さんがどう思い、どう感じているのかを察することもですが、その方の人となりも同じように見えてきます。現役の頃は仕事を一生懸命されてきた方、農業をされてきて御飯は早く食べて仕事に移る方、主婦のためみんなが食べてからでないとい食べ始められない方、本当に様々です。その様々さを見つけること、見つけて認めることが介護の仕事の楽しさであったり、技術であったりすると思います。その介護を通して、利用者さんと職員という関係から、相互に相手を思いやる気持ちが根底にある人間関係が生まれるのではないかと考えています。健康な頃を全く知らなくても、この関係を新たに結ぶことが出来る行為が介護であると思います。

私たちは老いと共に病気を抱えるようになります。「この病気になりたい」と選択することは出来ません。認知症という病気を抱えた人を大変だと思わずに、このやっかいな病気と一生懸命闘っている人と捉え、その人と一緒に悩んだり、迷ったりすることで、病気と付き合っていく方法を見つけたいと思います。

